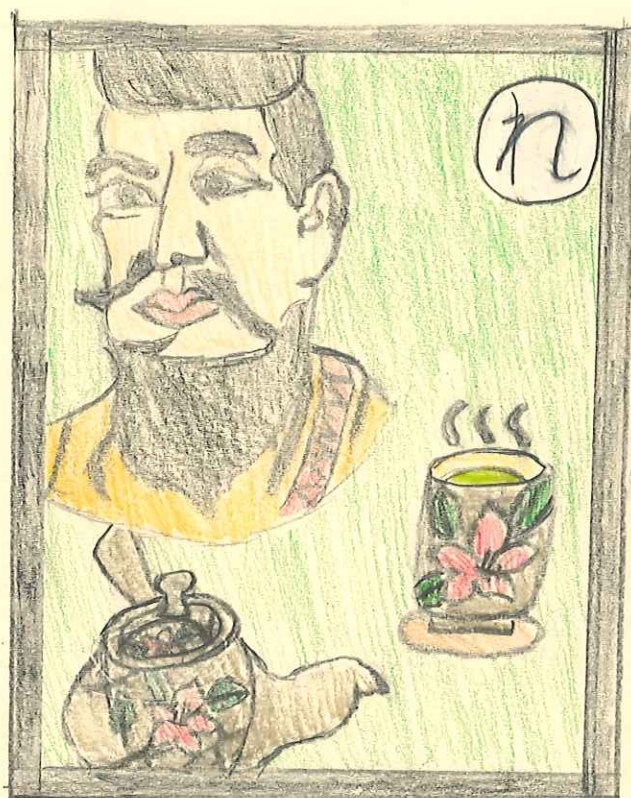


烈公のお茶を作った
御茶園台地



水戸市立千波小学校

6年2組
野澤はる菜

目 次

1. 研究の動機	P. 1
2. 研究の進め方	P. 1
3. 研究内容	
(1) 郷土資料、インターネットによる下調べ	
① 水戸茶の始まり	P. 2
② 水戸茶の改良	P. 2
③ 水戸の製茶のあゆみ	P. 3
④ 『御茶園』の跡が残る地図	P. 3
(2) 現地での取材	
① 『御茶園』の跡を訪ねて	P. 4
② 石井商店さんの周辺	P. 5
③ 石井商店さんへの取材	P. 5
(3) 今に残る『御茶園』の跡（地図）	P. 7
4. 研究内容のまとめ	
(1) 御茶園の地形について	P. 8
(2) 美しい風景	P. 8
(3) 産業発展へのこうけん	P. 8

1. 研究の動機

私が毎朝乗車するスクールバスは、『御茶園通り』を走ります。

『御茶園通り』というのは、水戸市千波町の逆川に架かる『本郷橋』から西へ延びる通りで、県道50号水戸・神栖線までの街道をいいます。

『御茶園通り』には、『御茶園』というバス停もあります。これは、この辺りの地名で、『おさえん』と読みます。この読み方も不思議ですが、そもそも、この辺りで『お茶』を栽培しているのか疑問に思いました。そこで、両親に聞いてみました。すると、「この辺りにお茶畑はないよ。」といます。

『お茶畑』が無いのに、なぜ『御茶園』というバス停があるのか？とても興味がわいてきました。もしかしたら、私の住んでいるこの地域は、お茶と深い関わりがあるのではないかと考えました。

そこで、『御茶園』と呼ばれるこの地域の歴史について調べてみることにしました。

2. 研究の進め方

(1) 書籍、資料による下調べ

地元図書館で郷土に関する資料を探しました。

(2) インターネットによる下調べ

各商工会議所、業界団体などのホームページから関連する情報を探しました。

(3) 現地での取材

① 下調べした情報に基づき現地を調査しました。

② 地元の方にお話を伺いました。

3. 研究内容

(1) 郷土資料、インターネットによる下調べ

水戸市見和図書館に『緑岡の今と昔』という郷土資料があり、ここに『御茶園』のことが書かれていました。

また、水戸商工会議所のホームページなどからも情報を収集しました。

それらの資料からわかったことを以下にまとめました。

① 水戸茶の始まり

水戸徳川家第2代藩主、徳川光圀は、旧緑岡村（現在の水戸市見川町）に『高枕亭』という茶室を作った時、京都宇治（宇治市）から茶の実を取寄せ薬草園を開きました。

この頃から、水戸領ではお茶の栽培が行われ、額田村（那珂市）、部垂村（常陸大宮市）下古内村（城里町）、佐貫村（大子町）などで始まりました。これが『水戸茶』と呼ばれていたものです。

この頃の「水戸茶」は、品質の良くないお茶であったと言われています。

② 水戸茶の改良

水戸徳川家第9代藩主、徳川斉昭は、『水戸茶』の改良に取り組みました。

お茶で有名な京都宇治（宇治市）から、お茶づくりの名人『小川佐助（おがわさすけ）』さんを招いて、『水戸茶』の改良を命じました。

小川佐助さんは、水戸領内の茶園を歩き、品質の良いお茶の木を選んでお茶づくりを教えることにしました。そこで、旧緑岡村（現在の水戸市千波町御茶園）に番屋を置き、茶園を開きました。ここで、『水戸茶』が、さらにおいしくなるように栽培技術の改良に取り組み、お茶づくりの指導に当たりました。

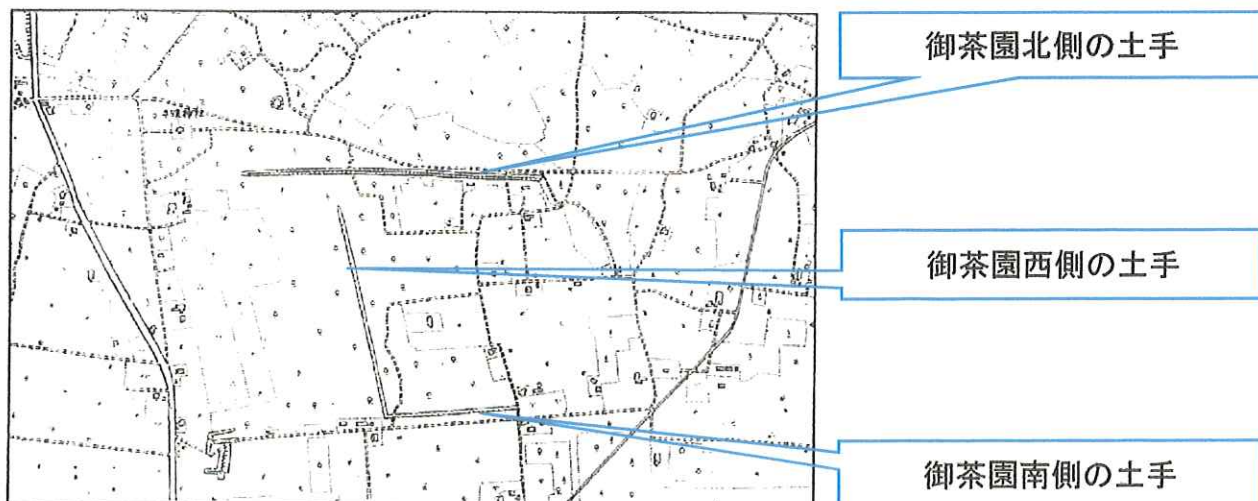
水戸の製茶のあゆみを次のページに年表としてまとめました。

③ 水戸の製茶のあゆみ

年 代	主 な 出 来 事
1665年 (寛文5年)	水戸藩第2代藩主、徳川光圀が徳川家の別邸として民間から買い上げ旧緑岡村（現在の水戸市見川町）に『高枕亭』という質素な茶室をつくった。 ※水戸商工会議所ホームページより引用
1807年 (文化4年)	間宮七郎平なる者、宇治から茶師を招き、製茶技術の改良を行い、江戸をはじめ、各地に販路を広めた。
1834年 (天保5年)	水戸藩第9代藩主、徳川斉昭が江戸駒込の別邸にて、宇治の茶師小川佐助に製茶技術の改良を命じた。
1835年 (天保6年)	小川佐助を水戸藩に招き、植物係として偕楽園の梅の栽培に従事していた長尾佐太夫の手下に置いた。 旧緑岡村（現在の水戸市千波町御茶園）にお手もと金で御茶園を開き、小川佐助を指導に当たらせた。 御茶園を開いた土地は、市毛氏の私有地であったが、斉昭によって移転を命じられた。
1839年 (天保10年)	御茶園の生葉で製茶を始めた。 近村でも御茶園の生葉を買い入れた。 宇治の茶師尾崎有庵の手代文平を御茶園に招き、お茶の製法を伝授させた。

④ 『御茶園』の跡が残る地図

昭和9年の頃の地図があり、ここには御茶園の土手の跡が残されています。



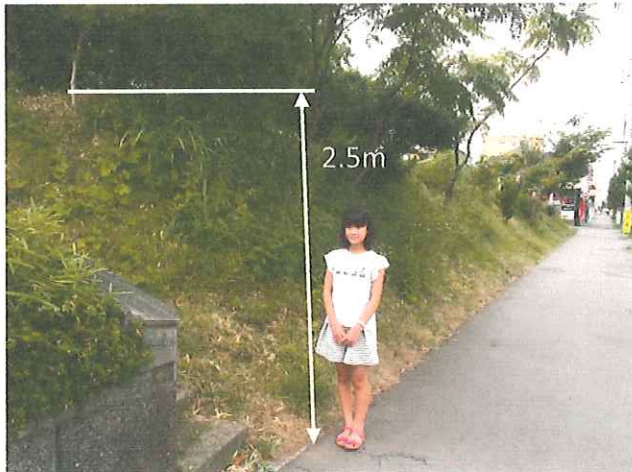
(2) 現地での取材

郷土資料には『御茶園』の跡はどこかという説明が書かれていました。

そこで、現地に残されている跡を探しに行くことにしました。

① 『御茶園』の跡を訪ねて

『御茶園通り』に沿った南側の土地には、一部に切り崩された土手の跡が見られます。道路を広げたため、『御茶園』北側の土手が消滅してしまった跡です。写真は、山縣産婦人科病院の西側に残されている土手で、この土手を東側から撮影したものです。（写真〔ア〕）この土手は東に向かって高さが高くなっており、最も高い所では、2.5mもの高さがあります。周囲の土手には桜が植えられていたと考えられていますが、その跡はありません。



写真〔ア〕



山縣産婦人科
から続く路地

写真〔イ〕

写真〔ア〕の土手と山縣産婦人科病院の間にある路地を入ると、路地は曲がって細くなり、高木弥栄建設の前の十字路に出ます。ここは番屋の跡で井戸が残っていたとされていますが、現在は、空地となっています。（写真〔イ〕）路地はさらに南に続き、茂手木さん宅で終わります。この路地が『御茶園』の東側で、この十字路が東側の入口とされています。

『御茶園』の南側は、山本整形外科から茂手木さん宅までの道すじで、追鳥狩りの敷地と接していました。そのため、馬の進入を防ぐための土手と堀が築かれていたそうです。今では、道すじから一軒分裏手に土手と堀らしき跡があるのみです。

『御茶園』の西側は、ドムスオサエンマンション脇の路地と考えられますが、すっかり住宅地となり、今では土手の跡は見られません。

② 石井商店さんの周辺

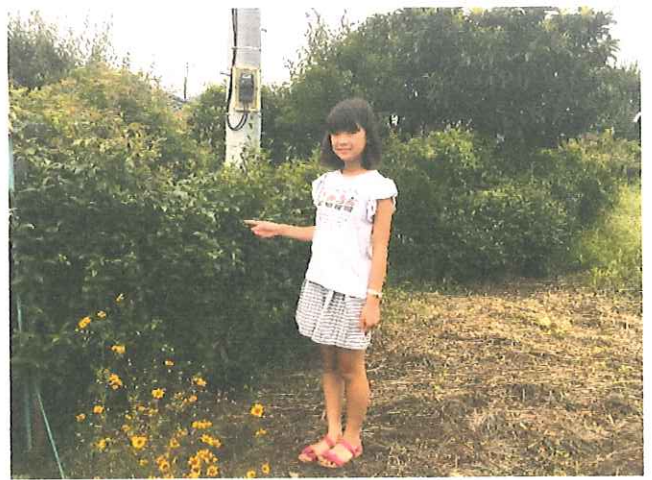
『御茶園』の中央を高木弥栄建設の前の十字路から西に道路が延びています。

中央部の十字路脇に石井商店さん（写真〔ウ〕）がありますが、ここは番屋の跡で井戸があり、今でも飲用水として使用されているそうです。また、この番屋付近には、エノキの大木と氏神様の祠（ほこら）があったとされています。

昭和30年頃まで、中央の道路沿いには茶樹が残り、茶摘みをしていたそうです。現在ではわずかに数本残っているのみです。（写真〔エ〕）



写真〔ウ〕



写真〔エ〕

③ 石井商店さんへの取材

『御茶園』の中心部にあった石井商店さんに、その跡が残されているのではないかと考え訪ねると、石井商店さんのおじいちゃんとおばあちゃんが、応対してくださいました。

石井商店さんでは、以下の調査資料をいただくことができました。

史跡案
千夜御茶園地名由来について

この地は古くは水戸徳川家九代藩主徳川光圀公時代に遡り茶園が造園されたといわれている

その後、九代藩主徳川有昭公は領内の産業発達の環として、茶栽培技術の改良を計るため、宇治の茶師小川佐助を招聘して、植物学、長尾佐大夫の配下に置くと共に当地に番所を設置した。

有昭公は新茶園を拓き優良品種を導入し、領内の村々に試作展示させた。

天保5年には、佐助の指導により製茶技術改良が行われ、結果水戸領内の茶葉は格段的に飛躍した。即ち当地、御茶園における茶葉の栽培は、有昭公の重要な起長となりました。尚、水戸市の茶葉には、(丸) 然るに茶を伴った御茶園台地と歌ゆかた。

いただいた資料は、御茶園の郷土について調べている人から提供されたそうです。この資料によれば、徳川齊昭が産業としての茶業発展にこうけんしていたことがわかります。

◎石井商店さんに聞きました。

Q1 御茶園で使用していた井戸水を今でも飲用水として飲んでいるのですか？

A1 今でも井戸水を飲用水として飲んでいますが、昔は、手動のポンプで井戸水をくみ上げていましたが、今は、電動ポンプでくみ上げています。

Q2 番屋付近には、エノキの大木があったのですか？

A2 エノキの大木ではなくて、モチノキの大木です。大人でも手が回らないほどの太い大木でした。根も枝も周囲に影響するため、ばっさいしました。現在は、切り株だけが残っています。

Q2 氏神様の祠（ほこら）は、今でもあるのですか？

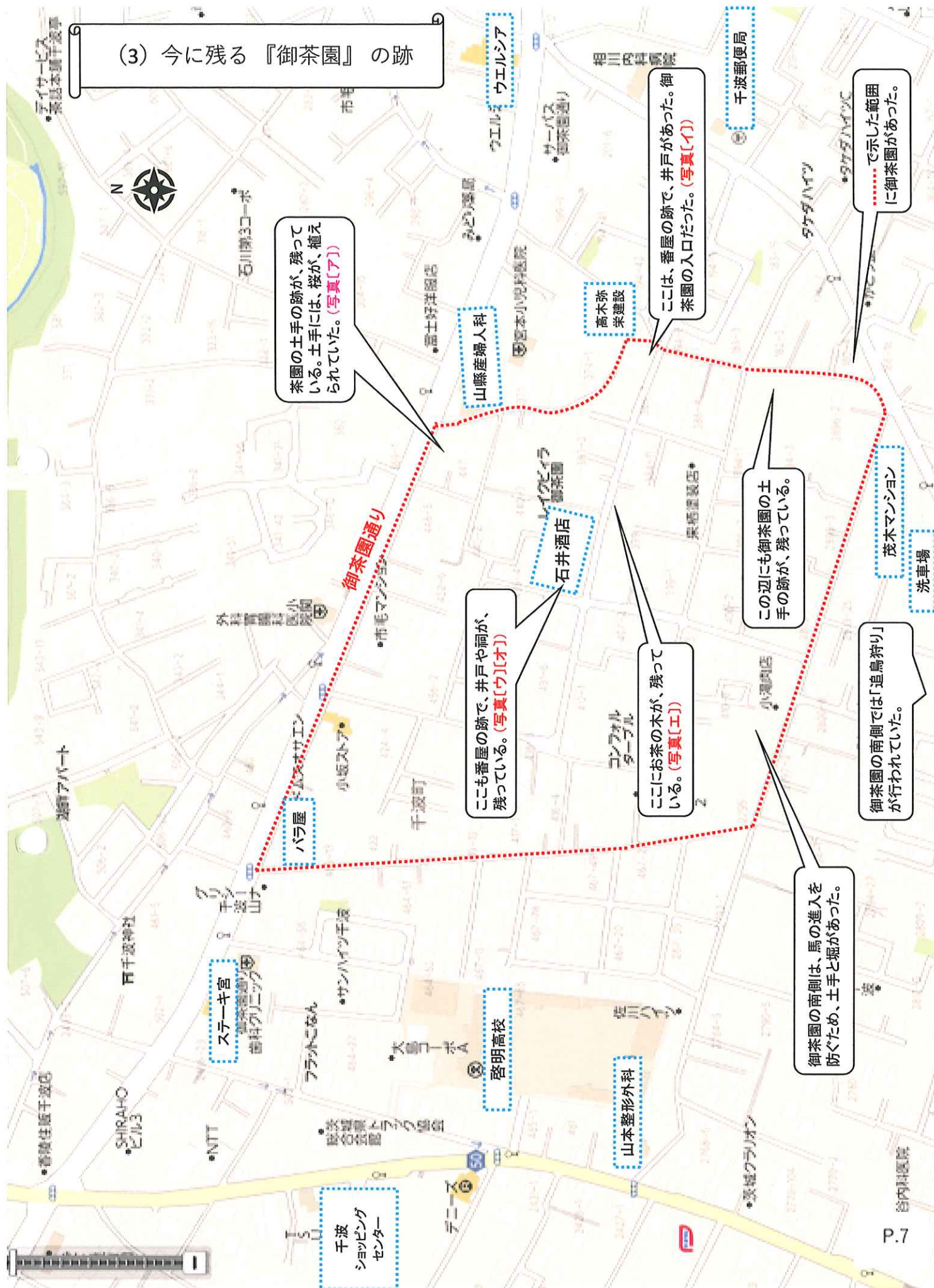
A2 店の横にあります。現在は、土台や屋根がモルタルで作られていますが、昔は、木製で作られていて、屋根には銅板が使われていました。（写真〔オ〕）



写真〔オ〕

最後に、石井商店のおじいちゃんから、御茶園（おさえん）の地名についてお話がありました。昔は、「おちゃえん」と読んでいたそうですが、いつのまにか「おさえん」と読むようになったそうです。市や県には「おちゃえん」という読み方に正すようお願いしたそうですが、結局、「おさえん」という読み方に決まったそうです。

(3) 今に残る『御茶園』の跡



茶園の土手の跡が、残っている。土手には、桜が、植えられていた。(写真[A])

ここも番屋の跡で、井戸や洞が、残っている。(写真[U][オ])

ここにお茶の木が、残っている。(写真[E])

ここは、番屋の跡で、井戸があった。御茶園の入口だった。(写真[I])

この辺にも御茶園の土手の跡が、残っている。

御茶園の南側は、馬の進入を防ぐため、土手と堀があった。

御茶園の南側では「追鳥狩り」が行われていた。

で示した範囲に御茶園があった。

4. 研究内容のまとめ

(1) 御茶園の地形・施設について

『御茶園』の跡を巡り、以下のような特徴がわかりました。

- ① 周囲に土手があり、土手には桜が植えられていた。
- ② 御茶園通りよりも高台になっている。
- ③ 追鳥狩りの敷地が南側に隣接していた。
- ④ 南側には堀が設けられていた。
- ⑤ 東側と中心部には番所、井戸が各所にあった。
- ⑥ 借樂園に匹敵する程の広大な土地でお茶を栽培していた。

(2) 美しい風景

私は、『御茶園』の跡を巡りながら、広大なお茶畑の周囲に桜が満開となっている光景を想像していました。この敷地の広さは、地図上で確認すると、借樂園の広さにひびきすることがわかりました。徳川斉昭は、『借樂園』を造ったことで知られています。千波湖を中心とした美しい風景を造り上げていたのかもしれない。

(3) 産業発展への貢献

茨城県の茶業発展という視点で考えてみました。茨城県は、関東地方では埼玉県に次ぐお茶の生産地というデータがありました。中でも『奥久慈茶』『古内茶』『さしま茶』は、茨城三大銘茶といわれています。『奥久慈茶の里づくり協議会』『さしま茶協会』のホームページには、どちらも宇治茶の製法を導入していることや江戸時代後期に飛躍的に品質が上昇したと書かれています。このことは、石井商店さんでいただいた資料からも、徳川斉昭が茶業という産業の飛躍的な発展にこうけんしたことがわかりました。